

— 桂 離 宮 —

桂 垣 (かつらがき)



桂垣(表)



桂離宮の桂川沿いに「桂垣」と呼んでいる生垣があります。「笹垣」ともいいます。ハチクという種類の竹を土から生えているまま折り曲げて、下地となる建仁寺垣(割竹を縦に隙間なく張り並べ、半割竹で挟んでシュロ縄で結んだ竹垣)に編みつけているものです。垣の長さは約250mあり、約800本のハチクが編み付けられています。

竹は、折り曲げる部分に縦に割れ目を入れ、ねじりながら曲げますが枯れることはありません。近々全面改修工事を行う予定をしています。



桂垣(裏)



みゆきもん そとこしかけ

御幸門と外腰掛



御幸門は、表門から50メートルほど入ったところにある

かやぶきりづまづくり

茅葺切妻造の簡素な門です。もとは八条宮(桂宮)二代智忠親

としただ

王が後水尾上皇をお迎えするために造られた門で、「竹門」「竹御門」と呼ばれ、門番所も付属していました。

やかひと

その後この門はなくなりましたが、八代家仁親王が再建され、現在の形になっています。



そとこしかけ

よせむねづくり

外腰掛は、お茶席のお待合として造られた茅葺寄棟造の建物で、自

すなせつちん

然木の姿を生かして造られております。扉の所は砂雪隠と言ひ、現在のトイレですが、常に綺麗に掃除し実際には殆ど使用する事はなく、飾雪隠ともいわれます。

桂離宮では、御幸門と外腰掛が今年の冬に茅葺屋根の全面葺替えを行いました。これは茅葺きの耐用年数であるおよそ10年が経過し、劣化が顕著に現れ始めたためです。桂離宮内にある松琴亭と笑意軒の茅葺屋根は一般的な山茅(すすき)が使用されていますが、御幸門と外腰掛にはアヤマ茅が使用されています。今春から美しく蘇った御幸門と外腰掛をご覧頂けます。

砂雪隠内部



— 桂 離 宮 —

かつらがき

桂垣 作業工程



《京都》御所と離宮の葉(其の一)にて紹介しました桂垣ですが、今年(平成25年)の2月～3月に改修工事を行いました。作業工程を紹介します。



① まずは、建仁寺垣を立ち上げます。



② 次に建仁寺垣にハチクの穂(枝)を編み付けていきます。



③ 内側からの竹を曲げる部分に縦に割れ目を入れ、生垣として編みつけていきます。



④ 内側から表にL字型に折り曲げた竹の部分写真です。○印の部分では折れ曲がっているのが見えます。



⑤ 生垣として成形されて完成。



が桂垣の部分

— 桂 離 宮 —

土 橋

観



桂離宮には大小あわせて6基の土橋があります(池にかかる反りの大きい橋は3基)。土橋とは土を乗せてある橋のことで、木材で組んだ橋の上に土を乗せ、桂離宮では左右に苔を張って美しく仕上げられています。

使われる木はクリ材でシバグリ(柴栗)といい、小粒の実を付ける山野に自生している原種です。

クリ材は耐久性が高く、水湿にも強い材として幅広く利用され、その性質から建物の土台や鉄道の枕木にも使われてきました。

土橋で使われるクリ材の表面は、ナグリという技術で削り出されています。ナグリは主にクリ材で使用されてきた技術で、ちよな手斧という道具で荒削りし、凸凹があるように仕上げる表面加工です。

土橋表面の玉砂利の下は赤土で、クリ材の橋桁との間には漆喰たたきと杉皮が使われています。漆喰は三和土(土と石灰とにがりを合わせ、叩いて仕上げたもの)で厚さ3センチを三層に重ねて仕上げます。一層で9センチに打つと割れた時には、一気に下まで割れてしまうことがあるので、三層に分けて割れに対応します。更に漆喰の下は杉皮を敷きますが、これは結露した水分の調湿に使われ、これらは上部から伝わる水を木材まで通さない役割を果たしています。

土橋の左右の苔の部分は、杉苔を使用し、その土台は赤土です。赤土の粘土質を利用して橋の両側部分を整形します。粘度が重要で、適度な柔らかさがないとひび割れがおこり、そこから水が回り苔の部分が崩れてしまいます。



ナグリ加工された橋桁



京都御所御内庭の土橋

桂離宮の土橋は京都御所の土橋のような手摺りがありませんが、反りが大きいので歩きやすいように階段木があります。

— 桂 離 宮 —

苑路を照らす燈籠



松琴亭上空の中秋の名月を月波楼から望む

京都御所の燈械、釣燈籠や燈台について[葉其の十](#)で取り上げました。燈籠には、釣燈籠の他に置燈籠があり、今回は桂離宮の置燈籠について紹介したいと思います。

置燈籠には、金属製、木製、陶器製や石製のものがありますが、桂離宮にあるものは全て石製で、さまざまな形のものが池の周りに24基配置されています。



● 燈籠の位置



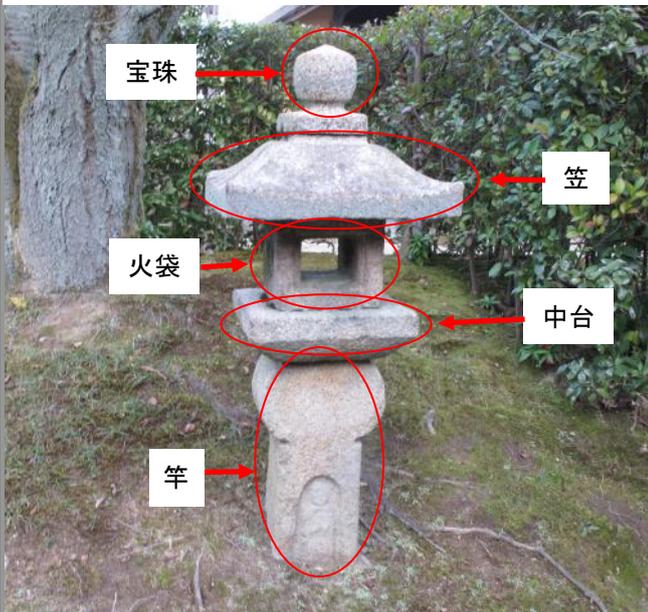
賞花亭付近にある燈籠(図:①)



左の写真の燈籠は池の南側、賞花亭の東北側にあり、
やかひと 家仁親王(桂宮八代目の親王)が「水蛭燈籠」と名付けられた
みずぼたるとうろう
 燈籠です(図:①)。

「池ひろミうつれハ水の蛭かとむかふもあかぬ夜半の灯火」
 と家仁親王が詠まれたように、燈籠に灯されたあかりが池に
 映ると、蛭が飛んでいるかのように見えたようです。

竿が地中に埋められているのが特徴で、生け込み型燈籠と
 呼ばれます。この形式の燈籠は17基あります。



書院北側にある燈籠(図:②)



洲浜南側にある記号や石像が彫られている燈籠(図:③)



中段の写真は、生け込み型燈籠の一種で織部型燈籠と呼ばれます(図:②, ③)。この燈籠は、江戸時代の大名で茶人の古田織部が好んだ燈籠の形であったことからその名が付いたとも言われています。頂上に宝珠があり、笠・火袋・中台(火袋の台となる部分)が四角形で、竿の上部が横に張り出しています。織部型燈籠の中には竿に記号や石像が彫られているものがあり、これをキリシタンに関係づけてキリシタン燈籠と呼ばれることがあります。



洲浜にある岬燈籠(図:④)



左の写真の燈籠は、池の東側にある洲浜・岬の先端に置かれる岬燈籠と呼ばれる燈籠です。燈籠を灯台に見立て、洲浜一帯は海辺の風景を表現しています(図:④)。

この岬燈籠は、比較的小型の灯籠で、竿がないため地面に近い位置に火が灯されるのが特徴です。桂離宮には、岬燈籠と同様に竿がなく地面に置かれる燈籠はこのほかに2基あります。



中島にある燈籠(写真左側:左の窓が日, 写真右側:右の窓が月を表している 図:⑤)



その一つは池の中島にあり、火袋が四角く、その窓には月と日の意匠があらわされています(図:⑤)。

もう一つの燈籠は、笑意軒の北側にある舟着場付近にあります(図:⑥)。火袋と笠で構成されている燈籠で、三光燈籠と呼ばれています。

笑意軒前の舟着付近にある燈籠(図:⑥)



梅の馬場にある燈籠(図:⑦)



笑意軒北側にある燈籠(図:⑧)



下段の写真の燈籠は、雪見型燈籠と呼ばれます。この形式の燈籠は、笠が大きく、三脚もしくは四脚になっているのが特徴です。左の写真の燈籠は、おんりんどう園林堂前の土橋を渡った先にある梅の馬場に置かれています。これは、笠や火袋が上から見て六角形になっている四脚の燈籠です(図:⑦)。右の写真の燈籠は、笑意軒北側にある飛び石の脇に置かれています。これは笠や火袋が上から見て三角形になっている三脚の燈籠です(図:⑧)。



園林堂の前にある燈籠(図:⑨, ⑩)



最後に紹介する燈籠は、堂前型燈籠や仏前型燈籠と呼ばれるものです。この燈籠は、園林堂の前にあります(写真:左, 図:⑨, ⑩)。竿が基礎に乗せられ、^{わらびて}笠の角が蕨手(上に巻いてある)となっているのが特徴です。この形式の燈籠は寺院によく見られ、献灯用として使用されています。

園林堂は、位牌などが置かれた持仏堂として使用されたので、この形式の燈籠が用いられたと思われます。

桂離宮の燈籠は、景観と実用、その両面への配慮のもとに、意匠や場所を吟味してさまざまな形のもので置かれているでしょう。

今回は桂離宮の燈籠について取り上げましたが、仙洞御所や修学院離宮にも魅力的な燈籠があります。それらについては今後取り上げたいと思います。

 マークは、御所・離宮の外側から、いつでもご覧になれます。

 マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

 マークは、春と秋には申込みが必要のない一般公開の際にご覧になれます。下記にて日程等をご確認ください。ようお願いします。<http://www.kunaicho.go.jp/event/kyotogosho/kyotogosho.html>

 マークは、通常公開していない場所にあります。

これまでの「《京都》御所と離宮の葉」については、
宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。



<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑3

宮内庁京都事務所 代表電話：075-211-1211

参観係直通電話：075-211-1215

其の十五：平成28年3月30日発行

《京都》御所と離宮の栞 ～其の二十六～

桂離宮のあられこぼしと延段 のべだん

桂離宮は、建物と庭園が見事に調和し、美しい景観を織りなす日本の名庭園の一つです。そんな桂離宮の美しさは足元にも及び、苑路には、自然石や切石が敷き並べられた光景が多く見られます。今号では、庭園の重要な役割を担う石敷きの道「あられこぼし」や「延段」についてご紹介します。

◆ あられこぼし

桂離宮の北東にある御幸門(栞其の一)から古書院の中門の間には、道幅の中央に膨らみのある柔らかな印象の小石を敷いた苑路があります。

この苑路の小石敷きは、まるであられをまき散らしたかのような風情に小石を敷き並べることから「あられこぼし」と呼ばれています。『桂御別業之記』という資料によると、後水尾上皇の桂離宮御幸に際し、「御幸道」において雨の後に供^ぶ奉の人々の草鞋が泥土に染まることを防ぐために小石が敷かれたようです。今のあられこぼしを見ると、道幅の中央を膨らませて水たまりを防ぎ、更には基礎部分に砂利を敷いて水はけを良くするなどの工夫がなされていることが分かります。

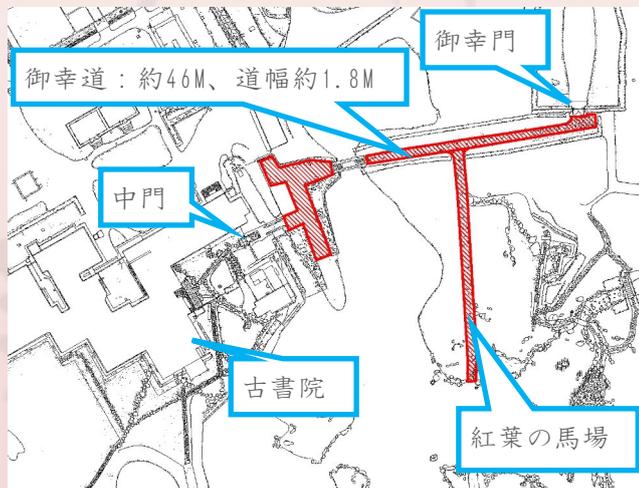
あられこぼしに使用されている小石は、地元桂川水系から採取されたチャートと呼ばれる堆積岩で加工せずそのまま使用されています。長さは、約7cm前後で、石の上面が平滑で縦長の形状をしているものが選別されています。その量

は、苑路の約1㎡あたり450～500個ほど使われ、あられこぼし苑路全体の約283㎡で、約13万個にもおよぶ小石が使用されています。

最近では、平成29年度に約4ヶ月をかけ、参観順路の最初の土橋付近の区域や通称「紅葉の馬場」といわれる区域を修繕しました。



あられこぼし(御幸門付近から見る)



あられこぼし位置図(赤色箇所)



あられこぼし(中門付近)

次に、あられこぼしの構造について、桂離宮の参観者休所で展示している模型(写真:①)と、その制作風景を見ながらご紹介します。

あられこぼししっくいに使用する材料は、小石の他に砂利と赤土のみで、漆喰やモルタルなどの石を固定する材料は使用しません。始めに排水を効率的に行うために砂利を敷き、その上に土台となる赤土を被せ、赤土の中に小石を縦方向に打ち込みます(写真:②、③)。縦方向に打ち込むことで、より外れにくくなります。

打ち込む際には、目地の模様いが忌み目地(見た目や外れやすさから避けるべきとされる、十文字や直線などを呈する目地)とならないように注意しながら小石を一つ一つパズルのように組み合わせて選定し、隣り合う石の側面や角をしっかりとかみ合わせて打ち込みます。打ち込みは、庭園技術を有する職人でも一日当たり20~30cm角しか施工でき

ず、とても難しい作業となります。

打ち込みを終えたら、できるだけ小石の高さを揃えるため、板を当てて叩き、微少な高さの調整を行います。(写真:④)。

最後に、目地に土を入れ込んで水を撒き、できるだけ隙間を埋めます。こうすることで更に強固に仕上がります。

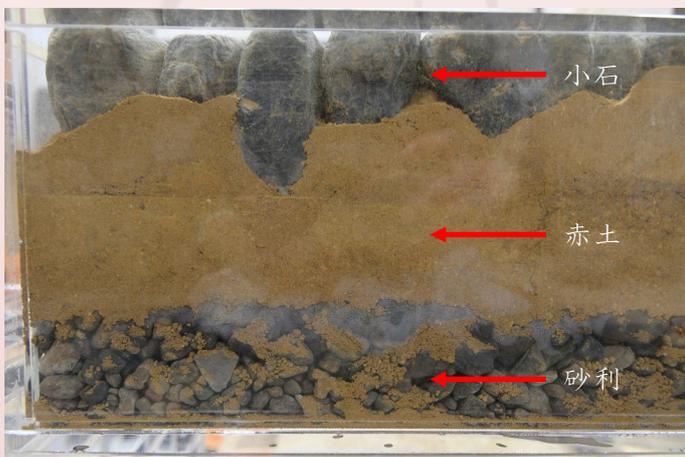
以上のように小石を敷き並べて打ち込むというシンプルな施工方法ですが、漆喰などを使用せずに苑路として仕上げるためには、職人の技術力や経験、知識が必要となります。



① あられこぼし模型



③ 石の打ち込み



② あられこぼし断面



④ 高さの調整

◆ 三種類の延段

漢字の書体に、真書(楷書)、行書、草書の三種類があり、ここから茶道、華道、絵画、作庭など色々な分野で、「真行草」の語で表現の違いを表す言い方が用いられるようになりました。桂離宮では、苑路の延段にその語が使われることがあります。

中門から古書院御輿寄前に敷かれた延段は、「真の延段(真の飛石とも)」と呼ばれ、すべて角のある切石で構成されており、書院に上がるためのアプローチに相応しく堅い印象があります。切石は花崗岩で、四角形や台形など41個の石が使用されています。

次に、松琴亭の茶会で、待合として使用された外腰掛の前にある延段は、「行の延段」と呼ばれ、細長い切石を使用して緊張を残しながらも、切石の内側部分を自然のまま残して自然石との調和を図り、少しでも自然の雰囲気を醸し出しています。客人を外腰掛の前から天の橋立を模した池の庭に導くように配されており、七種類の石で構成されています(石質一覧表参照)。

笑意軒前や書院の前の延段は、「草の延段」と呼ば

れ、切石は使用されず、七種類の自然石のみが使用されており、真や行に比べて、とても柔らかい雰囲気があります。

延段は、赤土を突き固め土台を作る「土極め」を行います。土極めした上に、切石や自然石を並べ、延段を形成していきます。真の延段は切石を隙間無く整然と敷き並べることによって完成とします。行の延段と草の延段については、目地に漆喰を入れ込み、石を固着させます。

◆ まとめ

参観苑路最初の御庭口門の敷居を跨ぐと、早速あられこぼしが目に入り、景観への期待が高まります。苑路を進むと、延段や飛石が場所毎に表現を変えながら次の場所へと導きます。石敷きの道はとても歩きやすく、雨天でも泥土で汚れることはありません。景観だけではなく実用的な部分にも効果を発揮するところに、客人をもてなす心遣いが感じられます。



古書院前の延段

真の延段	行の延段	草の延段
花崗岩	花崗岩	花崗岩
	チャート	チャート
	さがん 砂岩	砂岩
	けつがん 頁岩	頁岩
	ようけつぎょうかいがん 溶結凝灰岩	溶結凝灰岩
	りょくしよくへんがん 緑色片岩	閃緑岩
	アプライト花崗岩	凝灰岩

延段に用いられている石質一覧表



外腰掛前の延段



書院前の延段



花ごよみ ～ツツジ～



桂離宮 令和2年4月30日撮影

◆ ツツジ

御所・離宮にはクリシマツツジやサツキツツジなど数種類のツツジが咲いています。春の暖かさから夏の暑さに向かおうとする頃、晩春から初夏にかけて見頃を迎え、新緑の中に色鮮やかなツツジの赤色やピンク色が加わり、とても美しい風景が広がります。京都の御所と離宮のどの施設においても、参観苑路からツツジを鑑賞することができますが、特に桂離宮の賞花亭から苑路を下った先の御殿を背景に見るツツジの光景が参観される方に人気です(写真:上段)。

また、江戸時代においても、霊元上皇や孝明天皇がツツジを鑑賞されたという記録が残されており、昔も、今と同じようにこの鮮やかな色合いが人々を楽しませていた光景が目に浮かびます。



京都御所 御常御殿北側 令和2年5月7日撮影



修学院離宮 中離宮客殿西側 令和2年6月18日撮影



京都仙洞御所 南池中島 令和2年4月27日撮影

花ごよみ ～紅葉～

御所・離宮には多種多様な樹木や花々が植えられています。季節毎に可憐で美しい花を咲かせ、新緑や紅葉など、四季折々の違った表情を見ることができます。花ごよみのコーナーでは、そんな御所・離宮の美しさを織りなす樹木や花々を順次紹介していきたいと思えます。



京都仙洞御所 紅葉橋（中央）を望む 観

◆ 各所の紅葉

御所・離宮には秋を彩るイロハモミジやオオモミジが植えられています。特に、京都仙洞御所と桂離宮にはモミジが多数植えられている「紅葉山」があります。さらに、京都仙洞御所には北池と南池を結ぶ堀割に架けられた「紅葉橋」（[菜其の三](#)）と呼ばれる土橋があり、その名にたがわず非常に美しい紅葉が広がっています。その年の気候によって色づき始める時期や見頃に変化がありますが、例年11月下旬から12月上旬にかけて見頃を迎えます。また、見頃を迎えた紅葉だけでなく、木から散り敷いた紅葉も、自然の芸術作品として参観者の方々を楽しませています。



京都御所 御内庭 通



修学院離宮 浴龍池北西から千歳橋を望む 観



桂離宮 表門から御幸門を望む 観

京都仙洞御所・京都大宮御所案内図



- 1 京都大宮御所御車寄
- 2 京都大宮御所御常御殿南庭
- 3 御庭口
- 4 北池の舟着
- 5 阿古瀬淵と六枚橋
- 6 紀氏遺蹟の石碑
- 7 土橋
- 8 石橋
- 9 鹿滝
- 10 紅葉橋
- 11 紅葉山
- 12 蘇鉄山
- 13 雄滝
- 14 土佐橋
- 15 ハツ橋
- 16 中島
- 17 醒花亭
- 18 栴本社
- 19 洲浜
- 20 又新亭の外腰掛
- 21 又新亭

修学院離宮案内図



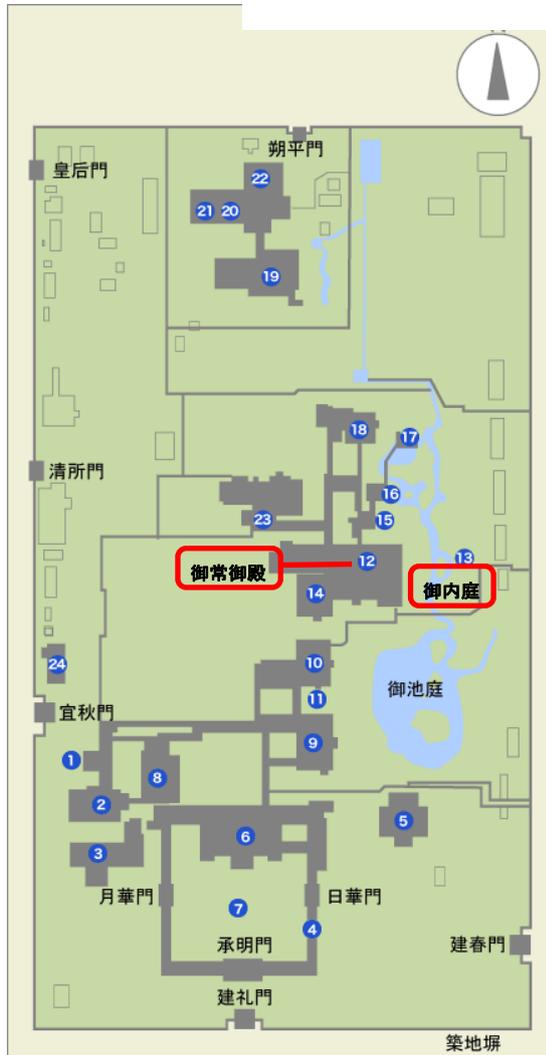
- 下離宮
- 1 御奥寄
 - 2 寿月鏡

- 中離宮
- 3 楽只野
 - 4 客殿
 - 5 松並木

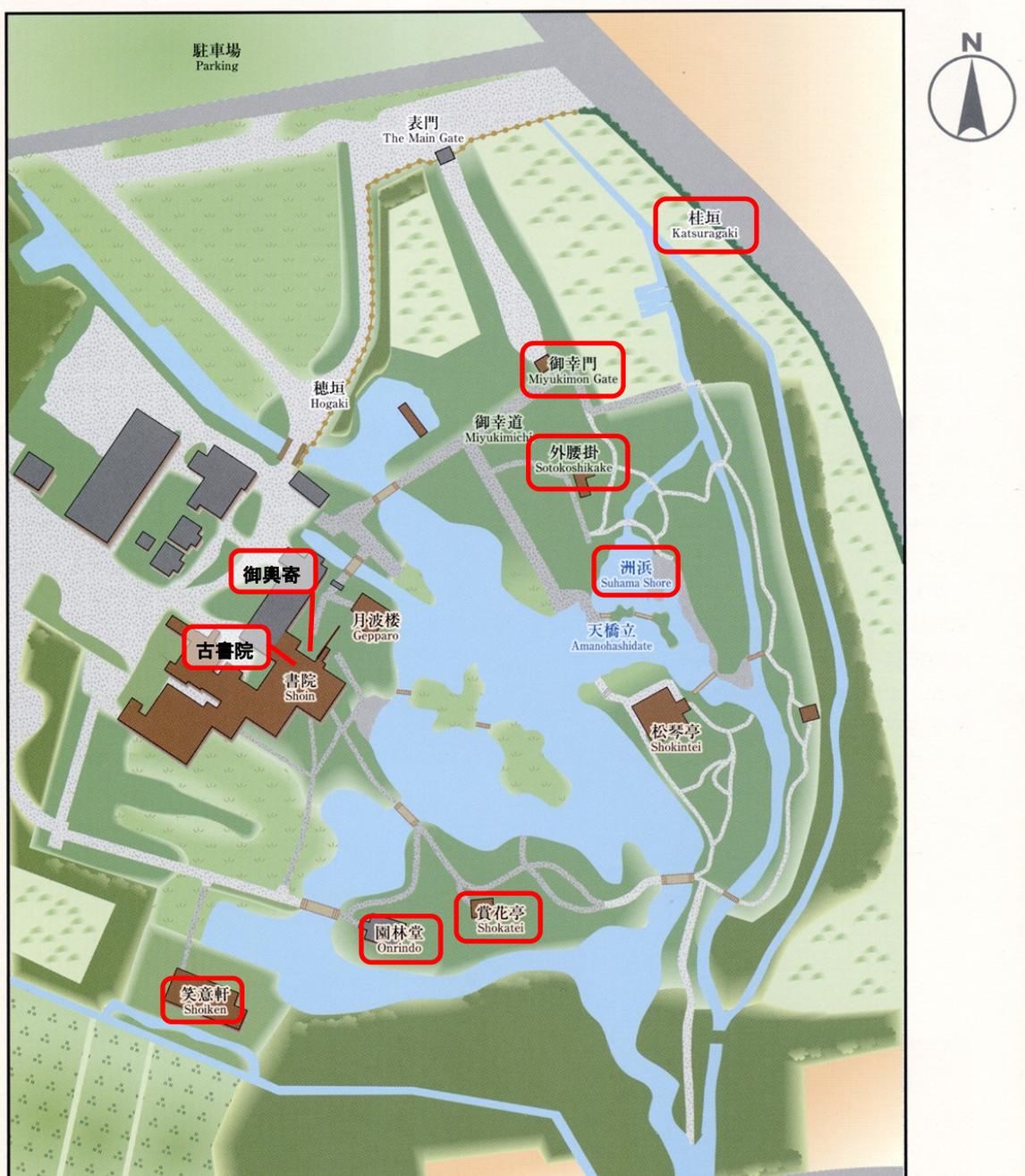
- 上離宮
- 6 大刈込
 - 7 隣雲亭
 - 8 万松塙
 - 9 千歳橋
 - 10 楓橋
 - 11 窮遠亭
 - 12 土橋
 - 13 御舟着
 - 14 西浜

京都御所案内図

- 1 御車寄
- 2 諸大夫の間
- 3 新御車寄
- 4 回廊
- 5 春興殿
- 6 紫宸殿
- 7 南庭
- 8 清涼殿
- 9 小御所
- 10 御学問所
- 11 蹴鞠の庭
- 12 御常御殿
- 13 御内庭
- 14 御三間
- 15 迎春
- 16 御涼所
- 17 聴雪
- 18 御花御殿
- 19 皇后宮常御殿
- 20 若宮御殿
- 21 姫宮御殿
- 22 飛香舎
- 23 参内殿
- 24 参観者休所



桂離宮案内図



観マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、 <http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

通マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、 <http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所
代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215